秩父市・豊島区
生涯活躍のまちづくり提案書

秩父市・豊島区共同

「地方居住を考えるワークショップ」参加者一同

○生涯活躍のまちづくり提案（要旨）

秩父市長　久喜　邦康　様
豊島区長　高野　之夫　様

2014 年、秩父市と豊島区は「消滅可能性都市」の指摘を受け、このピンチを乗り越えるためには、都市と様々な地域がともに成長・発展し、共存共栄を図っていくことが必要であると考えました。そのため 33 年来の『姉妹都市』である秩父市と豊島区は、ワークショップを開催し検討を進めてきました。共生のまちづくりこそが『生涯活躍のまち』ひいては日本全体の元気につながると私たちは確信しています。

つきましては、秩父市と豊島区の『生涯活躍のまちづくり』の今後のあり方について、次のとおり提案します。

「地方居住を考えるワークショップ」参加者一同

●提案1

～『多世代共生』 様々なニーズに合わせた住まい・コミュニティを形成～

【住まい・生活】

各世代の生活ステージに合った多様な住まいと、健康・医療施設や子どものための遊び場等、その周辺環境を整備したい。それに併せて、老若男女問わず移住者と秩父市民がスムーズに溶け込めるようなコミュニティを形成する。

【具体的な意見・要望】

- 秩父市の家庭での「ホームステイ」を実施する。
- 秩父市民と豊島区民が交流できる「シェアハウス」をつくる。
- 空き家を活用した民泊を実施し、二地域居住（ウィークエンドシティ秩父）に繋げる。
- 秩父市の空き家情報をネットワーク化し、活用しやすいものにする。
- 温泉宿泊施設や、高齢者向け住宅を充実させる。
- 公共交通網のないところにボランティア民間ドライバーやコミュニティバスを手当てし、自家用車がなくても暮らせる街にする。

- 健康維持のためスポーツ施設や教育施設、医療施設を充実させる。
- カフェ、食事処、ジム、スパ等『自由に使え、毎日行ける場所』を充実させる。

●提案2

～秩父＆豊島の『地域資源』を活かし継続的な交流の輪を広げる～

【地域交流・活性化】

小学校間の交流の場づくりなど、若年層の出入りが増える取組みを強化する。秩父＆豊島でコラボイベントを企画し、季節を問わず豊島区民をはじめとする多くの人々が秩父へ訪れる施策を行う。「点の交流」から「線の交流」へと繋げることを目指す。

【具体的な意見・要望】

- 秩父市に『としま区民果樹園』や『としま区民農園』をつくる。
- 秩父市に豊島区民の誕生記念樹を植樹する場所を設ける。
- 自然農法体験ができる環境を整備する。

- 個人商店を再生し、『番場通り』等の商店街に活気をもたせる。
- 池袋に秩父市のアンテナショップを設置する。

- 遠足、林間学校、対抗運動会を秩父市で開催し、小中学校同士の交流の場をつくる。
- 両市区の子ども達が自然の中で遊べるような『プレーパーク』を秩父市に設置する。

- 木工、銘仙織物など、秩父の伝統芸能を体験できる仕組みをつくる。
- 秩父の豊かな食文化を楽しめるよう『秩父ローカルグルメツアー』を開催する。
- 『アニメの聖地』という共通点を活かしたコラボイベントを企画する。
- 秩父市民が、織物、そば打ち等を豊島区民に教えるイベントを開催する。
- 『一日秩父市民』『一日豊島区民』等お互いの日常生活を体験できる仕組みをつくる。
- 秩父市の『夜祭』等、歴史・文化イベントに豊島区民を招待する。
- アートカルチャー都市構想の「劇場都市」関連イベントに秩父市民を招待する。
- 秩父市で開催される様々なイベントに「豊島区民利用優待券」をつける。
- 秩父札所巡り、木のおもちゃ等、また食文化を活かした交流などを積極的に広報する。
- 山登りや川遊び等、秩父の自然を活かしたアウトドアレジャーの魅力をもっとＰＲする。

- 西武秩父から池袋までノンストップの特急を走らせる。（ノンストップ秩父号）
- 西武鉄道に協力を依頼し将来的には池袋～秩父間を片道６０分で行けるようにする。
- 秩父鉄道ＳＬを西武線経由で池袋まで走行できるようにする。
- 豊島区⇔秩父市間の高速道路を使ったバス便をつくる。
- 両市区に提携駐車場をつくる。

- 豊島区と秩父市間で、職員の相互派遣（人事交流）を開始する。

●提案３

～秩父だからできる！誰もが活躍できる自己実現のまち～

【生きがい　～　働く、学ぶ】

移住者の多様な働き方を支援する仕組み、システムを構築する。生涯活躍できる仕事と出会える環境を整えていきたい。また、多世代が知的好奇心を満たすことができる様々なジャンルの学習環境を創造する。特に「学びの場」だけでなく、「教える場」もつくることで、活躍の場を広げていきたい。

【具体的な意見・要望】

- 秩父ならではの仕事を創出する。（農林業、秩父ブランドの創造・開発）
- 情報産業のサテライトオフィスで、移住して働ける環境を構築する。
- 『ちちぶ起業体験プログラム』をつくる。（資金援助や、週末だけの利用、売り場のシェア等、セカンドビジネスにも対応できるような優遇措置をとる。）
- 安心、安全な作物を作れるような場所・環境を広く設ける。
- 家庭菜園等で作った作物を販売できる場所を設ける。

- 豊島区民が秩父市の教育現場で講師ができる等の『教える場』をつくる。
- ネットを介して様々な分野の高度な教育が受けられる環境を充実させる。
- 秩父市にサテライト大学をつくる。
- 秩父で木工や自然について学べる場をつくる。

『３本の柱』実現に向けて！

～『姉妹都市』としての情報発信・PR強化等

文化や自然など、お互いの魅力を相互に認識するための情報共有と魅力の発信を強化し、秩父の多様な魅力を「住みたくなるまち」、二地域居住、移住へと繋げていく。

【具体的な意見・要望】

- 秩父の魅力を発信する専門のＮＰＯ法人等を設立し企業と連携して魅力を発信する。
- 秩父と豊島が互いにシェアできる媒体をつくる（専用サイト・アプリ・ＳＮＳなど）。
- ラジオ局を開設して、秩父市の地域コミュニティを活性化する。

『秩父市民と豊島区民が地方居住を考えるワークショップ』チームＡ提案

2016 年 12月 10日
Ａグループ：ファシリテーター　青木美恵

キャッチフレーズ
『made in 秩父　～ only one のライフスタイル ～』

はじめに

チーム A のテーマは「仲間」：知人、友人、すなわち「仲間」がいることが生活する上では最重要ではないか。秩父市と豊島区は姉妹都市「仲間」である。個人レベルでの「仲間」を意識することで、お互いの町を行き来することにつながるのではないかと考えた。

提案の目的　～秩父市＆豊島区のイメージアップ～

どちらも人を求めている
豊島区は F1 層と呼ばれる若い女性や子育て世代の人たち、秩父市は全体的な人口増加

どちらも活かせる資源を持っている
豊島区は繁華街・交通網・大手企業、秩父市は自然・伝統行事・土地

人と資源をうまく活用することにより、双方のイメージアップをはかり、行き交う関係ができる、結果として移住希望者増加が期待できるのではないか

提案１　市区連携のイベント企画運営

問題点　共同のイベントが少ない

具体的にイベント案をあげてみたい。

①移住体験プログラム
新しい施設を作る必要はない、行政による物件の手配・空き家を利用して無料 or 低価格でお試し居住、または暮らしの提案～シェアハウス・ホームステイ・長屋暮らし・二地域居住など今ある資源を有効に利用、特に秩父での古民家での居住体験は人気が出るのではないか。
②起業体験プログラム
行政が起業をサポート～資金援助や、空き店舗・空きオフィスを有効利用～例えば週末だけの利用・売り場をシェアするなど、セカンドビジネスとしても始められるように優遇措置をとる。

③祭り体験プログラム
ここでは「お助け隊プログラム」と命名。お祭りといえば秩父市のイメージが強いが、豊島区にも祭りは多い。大きな祭りだと組織がしっかりしていて人手不足にはならないが、小さな祭りの場合、運営のスタッフが足りない場合もあると聞く。そんな祭りにスタッフとして参加し、地元のひとたちと交流をはかり、お祭りを盛り上げる。祭りから始まり、やがてそれが大きな輪になれば、ボランティア活動やＮＰＯ活動などにもつながるのではないか。
④歴史体験プログラム
秩父市には自然だけではなく、秩父神社など歴史的建造物も多く存在する、特に番場町には見所が多い。豊島区も負けてはいない、かのフランク・ロイド・ライトが共同設計に名を連ねる自由学園明日館、2016 年 5 月に重要文化財に指定された雑司が谷の鬼子母神堂、お互いの魅力を知るための歴史的建造物を巡るガイドツアーを企画するのはどうだろう。

企業を巻き込んでのコラボイベントの提案

予算も多く、企画力もある企業を味方につけると、媒体での注目度もアップする。
豊島区を本社に置く「ビックカメラ」は過去に長瀞で企業とのコラボイベントを行っている。同じく豊島区に本社のある「無印良品」は、自社の家具を設置した「無印良品の家」のイベントを鎌倉や嬬恋で行っている、これを秩父でも実施してもらうのはどうだろう。本店が池袋にある「アニメイト」はアニメの聖地池袋でイベントを行っているが、秩父といえばアニメの「聖地巡礼」が有名である、まさにうってつけのコラボ企画が可能ではないか。

提案２　イメージ戦略～一本で繋がるサードプレイス～

問題点　そもそも姉妹都市という意識が薄い。

まずはキーワードについての説明。
豊島区池袋駅から秩父市西武秩父駅を一本で繋ぐ･･･これはまさに西武鉄道のイメージであろう。
ところがこの間の直通電車は、特急レッドアロー号しかないのである。秩父の住民は朝の通勤時間帯、飯能にて急行電車に乗換えなければならない。これは地元の方に聞いてびっくりの情報であった。是非とも西武鉄道さんにはお力添えいただきたい。秩父・池袋間のアクセスがもっと便利になれば、来年春開業予定の温泉施設にも豊島区民が多く訪れるであろう。その際には豊島区民のために割引券の発行もお願いしたい。

次のキーワード「サードプレイス」であるが、これは住居や職場以外に過ごす第三の場所と呼ばれる余暇時間を過ごす場所のことだ。秩父には自然も豊か、特産物も多くある。秩父には「秩父乾杯条例」と呼ばれる秩父産の地酒、ワイン、ウイスキー、ソフトドリンクで乾杯をして飲み会をスタートさせるという粋な条例もある。飲ミニケーションするには絶好の土地柄ではないか。個人的にはチームＡのメンバーも秩父にて心温まる会を催してもらった。わたしたちも経験した秩父の方たちの「おもてなしの心」

はきっと訪れる人たちに「又行きたい、又会いたい」と思わせるものになるであろう。その土地に自分の居場所を見つけることで、「何度も行きたくなる」から「いつか暮らしてみたい」と変化していくかもしれない。もちろんその際の秩父市の受入態勢のバックアップもお願いしたい。

さて、問題点に戻ろう。そもそも姉妹都市という意識が薄い･･･実は豊島区には秩父市のほかにも多くの交流都市の存在がある。秩父市は豊島区からのお誘いを待っている場合ではないのだ。秩父市民の気質としては、ついつい内向的になりがちかもしれない。しかし積極的にアピールしていかなければ、がんがん攻めている他の都市に負けてしまうのである。秩父市には今後 only one の存在として、観光案内やイベントの提案など豊島区に熱烈にアピールし続けていただきたい。将来的にはアンテナショップの開業も視野に入れてはどうであろう。

提案３　既存のモノを活かす情報共有体制

問題点　情報交換ができていない

ワークのメンバーである豊島区民から「回覧板に他の都市の企画したイベントが回ってくることがあるのに、秩父市からのお知らせは見たことがない」との意見があった。実際秩父市に行ってみると、数々の観光ポスターであるとか、パンフレットを目にする機会が多かった。それなのに外に向けての発信が弱いのでは、せっかく作った広報物が無駄になるのではないか。是非ともこの点を改善し、お互いに情報をシェアできる媒体を共同で作成すべきであろう。回覧板だけでなく、専用サイト・アプリ・ＳＮＳなど多世代にアピールすべきである。そこでは「各種イベント」「空き家情報」、「樹木のオーナー制度の情報」等のお知らせを優先的に豊島区に発信することで、「秩父市」と「豊島区」の親密度のイメージをアップさせることで、より良い関係が築かれるのではないか。

まとめ

以上三点の提案が秩父市と豊島区をつなぐ三本の矢となって、互いに影響し合い、秩父市と豊島区の交流と発展に寄与することができるのではないかと考える。

とはいえ最終的には秩父市と豊島区の人と人とのつながり、「仲間」意識を持って、行政、住民を問わず「楽しんで参加できる」ことが最も重要であろう。

これが私たちの提案する「Made in 秩父 only one のライフスタイル」である。

以上

『地方居住を考えるワークショップ』　　グループＢ提案要旨

2016年12月10日
Ｂグループ：ファシリテーター　宮崎　弘行

1．グループＢ　キャッチフレーズ

つながるまち　秩父　！

キャッチフレーズについて

私たちグループＢは、秩父市及び豊島区のイメージを次のように捉えキャッチフレーズを決定した。

１）秩父市は埼玉県西部の山間地に位置する自然豊かで、フレンドリーな街であり、垂直の町をイメージする。

２）豊島区は有数な都会である、池袋を有し、Global かつ自由な気概を有する水平の町をイメージする。

３）秩父と豊島は西武線を介し、唯一１本の線で結ばれる町である。時間は90分と遠くもなく、近くもない。この微妙な時間が双方が求める非日常と言う貴重な時間と空間を提供することが可能な唯一の町として存在する。

４）秩父と豊島はそのイメージを対比すると対照的であり、双方が求める非日常の生活が存在することから「週末を秩父で」「週末を豊島で」過ごすことが、ON と OFF の生活を私たちに提供する「つながるまち」として存在する。

このような状況から秩父・豊島はお互いの魅力を非日常の交換と言う形で結びつくことがもっともな妥当な町であると考え「**つながるまち　秩父！**」をキャッチフレーズに据えた。

１）生涯活躍のまちとして、すみたくなるまちづくりとは

私たちグループＢでは最終のテーマである「すみたくなるまち」の為にはどのようなまちであるべきかについて下記の観点から検討し、求める姿をイメージした。

①ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ力

・人間関係が面倒くさない人集るん！！（隣近所、地域）
・近所の人と共になごやかに生活できる町
・協働のまち、動けるうちは助け合う
・子育て介護を合わせて地域で助け合う
・ﾏｲﾉﾘﾃｲに（障害や貧困に）なっても生活圏の中心に居るまち
・自由に集える場所（カフェ、食事処、ジム、スパ）＊毎日行く場所がある。
・お友達、話し相手がたくさんいるといいよね。お祭り大会で常につながる。
・活気あるのがよい。
・趣味をいかせる。
・様々なジャンルの学習活動ができる。

・趣味を楽しみながら生きるまち
・何処にいてもいろいろな人とつながっていたい。

②交通
・都心と気軽に移動できる街
・交通インフラ（車がなくても住める）→民間ドライバー　コミュニテイバス
・高速道路を使ったバス便で便利になるまち
・住んでいる場所以外へも出かけやすい（都市部への買い物や遊び）
・買い物で「安い・早い」で豊島区に行ける。
・都会への移動　楽にできるとよい。

③食と農
・市民果樹園がある。（日本初？！）
・市民農園が広くてたくさんある。
・安心、安全な食べ物資源がつくれるまち
・美味しい食べ物、町の食、楽しみたし！　自然
・家庭菜園で作った作物を販売する場所がある。
・「休日」農家を支える地元市民とのつながりをつくる仕組みがある。
・農家民泊制度（行きたいときに行って、人間関係つくり）

④自然
・自然と共に静かに暮らせるまち
・老後は自然の中で過ごしたいと思う。
・自然に触れ合う機会が多い
・非日常をかかえる町
・絶景が欲しい　探すー見せる。
・総論としてはアウトドアの町　外遊び
・日帰りアウトドア
・家の近くに孫と遊べる川がある。
・カヌーで遊べる川がある、

⑤若者　欲しい！！
・フットワークの軽い若者の出入りが多い　劇団や楽団の稽古場アトリエ
・スポーツ施設、合宿に多種目可能にする。
・運動施設、自然の中でほしい、教育施設、秩父にも
・子供の多様な遊び場
・孫”ユース”中高生が住みたいと言ってくれる町

⑥生活

・生活ステージにあった多様な住居
・豊島区タウン＝秩父区民（分離してるのはどうかと思うが・・）
・豊島区、秩父市内の不動産交換を簡単なまち
・リピーター優遇の介護施設がある（ポイント制）
・山間地に宅地を広くとれる規制緩和のまち
・空き家に（経済的に、気楽に）滞在できる仕組みがある。
・子供の家族が泊まり込みができる場所がある（子供世帯のダーチャ）
・自然エネルギーで電気代、水道代がゼロのまち
・田舎でありながら医療施設が充実しているまち
・子供医療の充実

⑦仕組み（豊島への期待）
・滞在型、体験型　何度も行きたくなるプログラムを運営するＮＰＯが自治体企業を連携、運営
・豊島区に市の提携駐車場がある
・豊島区立学校に入学できる。
・豊島区にも「とまり木」を持っている。（人の集まるサロンの設営）

２）私たちが秩父に住みたくなるための提案を考える。

私たちグループＢでの議論からもたらされたキャッチフレーズ「つながる町　秩父！」であるためにはどうしたらよいか、私たちグループＢでは、そのためには、秩父を知り、好きになり、地方居住を考える町であることが必要と捉え、そのための幾つかの施策を下記のとおり提案する。

提案１．共に求める魅力は存在する。お互いをまずは知ろう！

秩父と豊島にはお互いが求める魅力がすでに多くの面で存在する。双方の魅力を集約し表現するならば、下記のとおり述べることができる。

豊島区の魅力
①グローバルで自由な空気観
②文化施設がたくさんある（大学、芸術劇場、飲食店）
③交通の便がいい（山手線に駅５つ）

秩父の魅力
①豊かな自然とフレンドリーな地域社会
②安心安全な農産物の生産と「農業民泊」等の体験機会
③お祭りなど伝統文化が大事にされている

秩父には「農業民泊」で地方の学校から、また海外からも多くの学校が訪れている。またこの「農業民泊」は人気を得て、繰り返し訪れてくるとの事であるが、豊島からの「農業民泊」はないとの事である。秩父と豊島は西武線で唯一 90 分で結ばれるまちであり、是非これらの情報の共有と魅力の発信だけでも大きな違いが生じてくる。

このことからも、交流の進まない要因は、双方に向けての情報の発信が充分ではなかったことに尽

きると考えられる。

提案２.「多世代共生」 と多様な住まい・コミュニティの形成
～秩父・豊島の非日常の体験から心の交流は始まる～

非日常の生活（＝週末を過ごす）を、まずは過ごすことから、お互いを知ることが可能と考える。そのための方向性と具体的な意見・提案は次のとおりである。まずは双方の魅力ある非日常を体験し、その魅力を知るための活動からお互いのファンとなることから交流は始まると考える。

《方向性》

- 障害や貧困になっても生活圏の中心にいられるまち
- 近所の人と共になごやかに生活できるまち
- 生活ステージに合った多様な住まいのあるまち

《具体的な意見・提案》

- ✓ 自家用車がなくても住めるまち（コミュニテイーバスの充実等）
- ✓ 農家民泊制度がある
- ✓ リピーター優遇の介護施設をつくる（ポイント制）
- ✓ 医療施設の充実
- ✓ 運動施設や教育機会の充実
- ✓ 孫〝ユース〟中高生が住みたいと言ってくれるような施策を行う
- ✓ 空き家に（経済的に、気軽に）滞在できる仕組み
- ✓ 子どもの家族が泊まり込みできる場所の整備（子ども世帯のダーチャ）

提案３．夢ある自然・歴史文化を活用
～お互いを好きになるには工夫も必要～

双方が好きになるためには、まずは双方の魅力を体験することが第一歩であるが、さらにその魅力を深めるのは、豊かな自然や、歴史文化を共有し深く体験することにある。そのためには、更なる工夫と、いくつかの施策の実施が必要と考える。そのための方向性と具体的な意見・提案は次のとおりである。

《方向性》

- 祭り大会等で、友達と常に繋がっている環境をつくる
- 自然に触れ合え、自然と共に静かに暮らせるまちにする
- 趣味を楽しみながら生きるまち
- 何処にいても、色々な人と繋がっていられるまち
- 孫とともに楽しめるまちにする

《具体的な意見・提案》

- ✓ 自由に使え毎日行ける場所（カフェ、食事処、ジム、スパ）の充実
- ✓ 『市民果樹園』をつくる
- ✓ 川遊びを中心にアウトドアをアピール
- ✓ 秩父ならではの絶景スポットを確立

提案４．アクセス・地域交流・学び・情報発信・更なる工夫
～更なる工夫で絆を結ぶ～

秩父を知り、好きになり、地方居住を考えるためには、体験するだけでは十分ではない。更なる魅力ある工夫を必要とする。インフラ整備等は当然、行政や関連機関を巻き込む大事業の展開となるが、私たちの考えた幾つかの提案には少しの工夫と努力で実施可能なものも存在する。地方居住を考えるには、更なる工夫で絆を結ぶ施策も必要であり、下記にその施策を提案する。

《方向性》

- 秩父市から池袋までにかかる時間の短縮と、交通インフラ整備（アクセス）
- フットワークの軽い若者の出入りが増えるような取組みをする（地域交流）
- 様々なジャンルの学習活動ができる場をつくる（学び）
- お互いのまちの情報の共有と魅力の発信を強化（情報発信）

《具体的な意見・提案》

- ✓ 都心や他の地域にも気軽に移動できる交通インフラ整備（アクセス）
- ✓ 秩父の子どもが豊島区立学校への越境入学制度（地域交流）
- ✓ ネットを介しての高度教育の充実、大学の秩父分校誘致（学び）
- ✓ 滞在型、体験型、何度も行きたくなるプログラムを運営するNPO 法人等を設立し、 企業と連携して魅力を発信する（情報発信）
- ✓ 豊島区、秩父市内の不動産交換を簡単にできるようにする（更なる工夫）

（最後に）

地方の魅力をどのように発信し、地域と交わっていくかは、アクテイブシニアと言われる私たちの世代にとっても生きがいに結びつく重要なことと考える。今回のワークショップに参加し、私自身が感じたことを最後に述べて提案を終える。

１） 秩父の魅力は今まで育まれてきた、豊かな自然と人の交わりにあり、従来その魅力を、魅力として充分に発信されていなかったことに現在のジレンマが存在するようだ。今回のワークショップを通じ語られた施策を中心に据え、どのように提案を展開し、周知するかが今後の最も重要な課題と思われる。

２） 地域居住には、まず第一に、豊かな自然と文化に触れ合える環境と人を受け入れるフレンドリーな住環境が前提であるが、秩父には、すでにこれらの環境が存在する。また祭りを中心とした豊かな文化と歴史を持ち、魅力を取り上げればきりがないほどである。後はこの魅力を魅力として伝えるための工夫と、今は足りない、学びや、暮らしやすさと言った、幾つかの工夫の創造が必要と考える。今回の議論で出た幾つかの提案を振り返ってみれば少しの努力で実現可能なものもある。実施される提案があるならば、継続的な施策として展開されることを望む。

３）　人口減少と空き家問題は切っても切り離せない問題であり、２ 地域居住や地域移住に対してはこれらの有効活用が重要な POINT と考える。もし秩父に私が移住するならば、ＣＣＲＣと言う地域と隔離された住居に入るのでなく、フレンドリーな地域の中に役割（それは文化か、学びか、働きかは人それぞれさまざまではあるが）を持って、地域に認められた居住者として受け入れられることを望むものである。　以上

『秩父市民と豊島区民が地方居住を考えるワークショップ』
Ｃグループ提案

2016 年 12 月 10 日
Ｃグループ：ファシリテーター　小池久雄

Ｃグループキャッチフレーズ
『森と一番近いまち！自然と文化の融合するまち！』

秩父市の自然、食、伝統などと、学び、暮らしやすさ、雇用などの文化を融合することで、「住みたくなるまち、秩父」になるとして、キャッチフレーズした。
第 1 回の講演、第 2 回の秩父市視察を踏まえ、第 3 回、第 4 回のグループワークで出た意見をまとめてＣチームの提案とする。

提案Ｃ－１　お互いの魅力をもっと楽しもう！

秩父市と豊島区の魅力は、それぞれ「自分にないもの」を補い合う関係である。お互いの魅力をより享受しやすいしくみをつくることが、交流の活性化につながる。

豊島区の魅力
①よその人を受け入れてくれる都会のコミュニティがある。
②文化施設がたくさんある。（劇場、大学、飲食店など）
③交通の便がいい。（山手線駅が 5 つあるなど）
　など

秩父市の魅力
①自然が豊かである。（しかし、活用されていない）
②お祭りなど伝統がある。（山車づくりの木工技術がある）
③食文化が豊かである。（そば、豚肉、日本酒など）
④地域のコミュニティがしっかりしている。（しかし、閉鎖的ともとれる）
　など

提案Ｃ－２　もっと秩父を知ろう！　もっと秩父を解放しよう！

豊島区は「秩父市をもっと知る」ことで、秩父市は「空き家活用、地域コミュニティの活性化、公共施設の豊島区民開放」などで、お互いの交流がもっと深まる。

①林間学校や遠足は、必ず秩父市に行く。

②秩父の「伝統芸能体験イベント」を、豊島区で開催する。
③秩父市の工芸品を、豊島区行事の「記念品」として積極的に活用する。
④「ちちぶラジオ局」を開局して、地域の情報を発信し、地域コミュニティをもっと活性化する。
⑤秩父市内の施設を豊島区民に開放し、市民、区民の交流を活性化する。
⑥家主は、積極的に空き家を貸し出して、二地域居住者、移住者の住宅、新規起業者の事務所などに活用してもらう。
⑦秩父市を豊島区のウィークエンドシティにする。週末は秩父ライフを楽しむ。
⑧豊島区に秩父市のアンテナショップをつくる。もっと情報発信して秩父市に呼び込む。
など

提案Ｃ－３
森と一番近いまちを楽しみ、学びたい！　自然と文化の融合するまちに住みたい！

豊島区民は、秩父市をもっと楽しみたいと思っている（自然、農業、食など）。実際、観光来訪者はたいへん多い。　しかし、移住するには「生活」に関わることを変えてほしいと考えている。交通インフラ、雇用増、開放的コミュニティ、情報発信など。これらが変化すれば、二地域居住人口、移住人口は増加し、転出抑制にもつながるはずである。

①秩父の自然を学び、楽しめる場をつくる。
②秩父の豊かな食文化を楽しめる、「秩父ローカルグルメツアー」を開催する。
③「ちちぶネイチャー大学（仮称）」で、秩父の木工や観光資源などについて学ぶことができる。
④魅力ある文化、自然をもっと積極的に情報発信する。
⑤自家用車に頼らなくとも、多様な交通手段が用意されている。（コミュニティバス、乗合タクシー、シニア割タクシーなど）
⑥情報産業の「秩父サテライトオフィス」を設置して、移住しても働ける環境を構築する。（超高速ブロードバンド整備）
⑦シニア世代が、その経験、知見を活かし、若者の起業を支援する。（シニア地域協力隊）
シニアにとっては「生きがい」になる
⑧多世代、外国人、また男女にかかわらず、開かれたコミュニティがある。
⑨子育て支援が充実している。
⑩秩父市、豊島区双方の空き家情報をネットワーク化して、活用しやすくする。
⑪西武鉄道に協力してもらい、将来は池袋～秩父市間を片道 60 分で行けるようにする。
（ノンストップちちぶ直行便）
⑫個人商店街を活性化し、楽しく散歩しながら買い物できるまちをつくる。
⑬「ちちぶ地域通貨」を秩父市、豊島区で発行し、商店街を活性化させる。

以上

『地方居住を考えるワークショップ』　　グループＤ提案まとめ

2016 年 12 月 10 日
Ｄグループ：ファシリテーター　岩熊　徹

1．グループＤ　キャッチフレーズ

気軽でオーライ（往来）！　大自然のまち　～ちょうちかい、ぶらりとしぜん

このキャッチフレーズは、90 分弱で行き来できる間柄の豊島区と秩父市をがお互いをよく知りあい、より深く交流し、未来戦略を推進する都市、豊島区と豊富な自然と伝統文化を保有する秩父市の往来人口を増やすことを起点とし、両市区間で培の相互の親しみ・愛着を培っていくことが「住みたくなるまち」へのベースとなる、との思いを込めています。

2、提案要旨

*提案１　**お互いの魅力についての認知度アップを両市区連携で推進**

まずは新旧の事柄含め、今一度お互いの持っている魅力を両市区民に認知してもらうことが必要である。昨年（平成 27 年）豊島区が実施した「定住・地方移住等に関する区民意識調査」においても、移住意向者のうち「秩父市に移住したくない」と回答した理由は、
「親しみのない場所だから」、「秩父市についてよく知らないから」」がそれぞれ 5 割弱に昇り、それぞれ回答理由の 1 位、2 位となっている。今後、秩父市への移住希望者を増やすためには、両市区が連携して、「親しみがあり」、「よく知っている」まちとなっていくことが必要なことは明白である。

＜具体的な意見・要望＞
・豊島区の優れた「利便性」を秩父市民にアピールする
　：交通網、買物、娯楽、趣味、学び、医療 etc
・秩父市の自然豊かな暮らしや活動を豊島区民にアピールする
　：農業体験（栽培や収穫など）、林業体験（木工など）、登山、トレッキング、釣り etc～
　※これらの事柄に「利用優待」を付加するなど
・豊島区の未来志向、先進性についての認知度のアップを推進する
　：アートカルチャー都市構想の「劇場都市」関連イベント等に秩父市民招待 etc
・秩父市の歴史や伝統文化、観光資源についての認知度のアップを推進する
　：夜祭への豊島区民招待 etc
　：秩父鉄道 SL を西武線経由で池袋駅まで走行

*提案２　**両市区の交流を深めるための新たなアクションが必要**

提言 1 のような形で、より「知り合うこと」を推進しながら、次なるステップとして不可欠な事象は

両市区間の交流を深化させていくことである。魅力を知る、感じるだけではお互いが「行き場、遊び場、あるいは通い場」で完結してしまう。市民と区民の交流が活性化することによって、そこにコミュニティが生まれ、地域への愛着が芽生える。両市区間の姉妹都市締結から 33 年が経過した今、姉妹都市としてのお互いの情報発信、PR等の活性化と刷新を行うとともに、新たな“交流ゴト”を企画、実施していくべきであろう。

＜具体的な意見・要望＞
・若年世代の交流促進を図る
　：小中学校同士の往来　～相互移動教室、林間学校、都心学校、対抗運動会 etc
　：豊島区プレーパークを秩父市に設置　～両市区の子供たちが自然の中で自由に遊ぶ
・多世代の交流促進を図る
　：お互いの日常生活を体験できる取組み　～1 日秩父市民・1 日豊島区民制度
　：両地区に気軽に滞在できるような場所（施設）を設置　～多世代の「交流クラブ」
　：両市区間の新たなイベントを企画・開催　～共通する「アニメ」を題材にする etc
・行政の交流を図る
　：豊島区と秩父市での職員相互出向の制度化

*提案３　**生涯活躍のまちとして住みたくなるまち＝生活諸条件＋生きがい＋地域特性**
「知り合い」、「交わり」の醸成によって育まれた親近感、愛着をバックグラウンドとして、いよいよ「住みたくなるまち」への形づくりをいかに行うかが焦点となる。ここで、まず目指す移住者のターゲットは誰なのか、ということを明確にしておかなければならない。この提言においては、シニア年代層が大半を占めたグループ D の総括であることから、そのターゲットを「元気なシニア」とする。「生涯活躍のまち（日本版 CCRC 構想）」においても、地方移住のターゲットを 65 歳以上の高齢者から 50 歳以上のシニアと変更し、より元気なうちからの移住を推進しようとしている。当提言もこの前提に立ち、「秩父市が豊島区の元気なシニア達にとって、「住みたくなるまち」となるための施策を提案する。

＜具体的な意見・要望＞
◇移住における居住・生活のための条件の整備
・利便性や安全・安心の確保が可能であること
　：居住経費の妥当性、医療環境の充実、地域内交通手段の整備
・地域内での交流があり孤立しないこと
　：居住地域でのコミュニティの存在
・移住者個々にとって、生きがい、やりがいに通じる主たる活動があること
　：就労先、新たな雇用、社会活動、創作活動などの場
※これらは、移住を行う上での「必要条件」または「標準装備」ともいうべき要素。しかし、これらが整備されたとしても、必ずしも「秩父でなければならない」という要素にはならない。秩父を選択する「秩父ならでは」の特性、言わば引きつける“磁石”となる要素が存在しなければならない。

◇秩父ならではの“磁石”となり得る要素の提供

・「利便性や安全・安心の確保が可能であること」について
　：豊島区と秩父市で災害時の相互救援・特定避難場所の協定を締結
　：住民登録、納税等の新たな制度の立案
・「帰属可能なコミュニティ～地域内での交流があり孤立しないこと」について
　：秩父のイベント（既存、今後企画ととも）に関連したコミュニティづくり
　：居住地域での元豊島区民＋秩父市民のコミュニティ形成
・「移住者個々にとって、生きがい、やりがいに通じる主たる活動があること」について
　：秩父の自然や文化を活用した仕事・活動の創出　～農業関係、林業関係、観光関係、
　　特産品からのブランド創造・開発 etc

*提案４　**豊島区と秩父市が相互で創る「二地域居住」**

提案 3 で示した、生活の必要条件が整備され秩父ならではの特性を打ち出すことができたとしても、現在の住居を整理・処分するまでには踏み切れない、また現状の生活利便性やコミュニティを捨てきれない、また移住にはどうしても不安がつきまとう、と感じる個々のケースも多いことが予測される。そこでもし豊島区と秩父市に二つの生活拠点を持てれば、現状と新たな生活の両得を味わえる展望が描けるとともに、元気なシニア達の心理面、行動面での活性剤となり、新たな生きがい、やりがいを形成するための可能性を広げることにも繋がるのではないだろうか。さらに将来は秩父が「終の棲家」となるためのステップとして、この「二地域居住」を考えることもできる。90 分弱で行き来できる「ちょうちかい」相互異空間（都心⇔自然、未来文化⇔伝統文化）は、両市区の持つ大きな強みであり「二地域居住」の最適地と考えられるではないだろうか。

＜具体的な意見・要望＞
・秩父市にいくつかの 2 地域居住拠点を設置
　：住居型、宿泊施設型などユーザーニーズに合わせた複数の居住スタイルを提案

「豊島区と秩父市、地方居住を考えるワークショップ」
Ｅグループ提案

２０１６年１２月１０日

Ｅグループ：ファシリテーター　清水　誠

【Ｅグループ】“キャッチフレーズ”

『まつりでそだてる、わたしの秩父くらし』

提案１　『豊島区と秩父市、お互いの魅力をもっと知る』

豊島区、秩父市がそれぞれの魅力を具体的に認識することでそれぞれの特性を活かした交流が展開できる。

（秩父市の魅力）
①自然：自然がすばらしい、豊かな場所、地球の窓、自然ジオパークなど
②歴史と伝統：歴史と伝統が豊富なまち（秩父神社、秩父の夜祭、銘仙織物）
③交通：都心に近い、池袋からレッドアロー号で 90 分、
④安らぎ：孫たちと遊べるまち、OFF を楽しめるまち（ON 豊島区）、人情味あるまち
⑤特徴：晴天率が高い、災害が少ないまち
課題として
①高齢者にとって住みやすいまちか。
②豊島区と秩父市、近いようで遠く感じる
③コミュニティなどの活動、活躍の場があるか、若々しいまちであるか。

（豊島区の魅力）
①利便性：コンパクト、利便性、若いまち、商業施設の充実、情報が集まる
②文化・芸術：文化・芸術のレベルの高さ、文教地区、文教施設の充実
③多様な人種・多世代：多様な人種、多世代が共生している、多文化存在
④親しみ：安らぐ場所、親しみの場所
課題として
①　豊島区民がどれだけ秩父に関心を持っているのか。

提案２　『こうすれば豊島と秩父が姉妹都市として交流が深まる』

豊島区と秩父市が双方向に良い関係を継続的に築いていくためには、特に双方の役割を明確にする必要がある。例えばシニア活躍のまち（豊島）／活力を得るまち（秩父）として ON（豊島）／OFF（秩父）を上手く切り替えることで、両地域がそれぞれの価値を高めることができる。自然、人、祭を介して交流するシニア豊島区民が秩父の営業マンとして PR できるかもしれない。

(交流のかたち)

① 学びの交流：秩父氏など秩父学をサテライト大学で学ぶ。豊島区で文化芸術を学ぶ。

② 双方向の交流：点から線へ双方向で多方面の安定的な交流

③ 青少年の交流：小学校間や青少年の交流、秩父で農業体験（ジャガイモ種植等）交流

④ IT 交流：IT を利用したバーチャルな交流

⑤ 祭：秩父夜祭を筆頭に伝統の祭が年間を通して数多く実施されている。子ども山車体験などもある。これらは交流の有効な機会である。

(活発な交流のための施策・しかけ)

① 民間と行政のすみ分け：交通、施設の確保、交流への呼びかけなど行政のリーダーシップを期待する。一方で民間・個人レベルにおける展開のきっかけをつくり、問題点を住民同士で解決し、互いに顔がみえる交流など“やらされている感”を持たない交流の姿もあることも大切である。

② 施設：秩父市の遊休住宅を利用した２地域居住の提供や交流を持つための施設、温泉宿泊施設、老人向け住宅の整備などが望まれる。さらに地盤が良いことを活かして首都圏の災害時の対策など恒久施設の整備が考えられる。

③ 区民が安らげる町：シニアにとって孫と一緒に遊べる「第二のふるさと」、「心の原点」となり、活躍のまち(豊島 ON)／活力を得るまち(秩父 OFF）と位置付ける。

④ PR 施策：札所巡礼の再開、木のおもちゃなど PR、食文化を生かした交流などの広報

⑤ 関連事業者の協力：往来を活発にするために西武鉄道の企画乗車券などを期待する。

⑦ 若者のＵターン施策：仕事と生きがいの提供、多世代共生の機運を醸成する。

提案３『生涯活躍のまちとして、住みたくなるまちづくり』

秩父のまちで出会った人が気になる、秩父のことが気にかかる、というふうに人と人の触れ合いがリピートして継続的な交流の輪が広がることを、住みたくなる街づくりの中心に据える。

秩父にはよそ者に対して閉鎖的な風習・考えもあったとされるが、伝統の祭りの運営に関わる人材不足などにより人々の考え方にも変化が現れ、よそから来た新しい人を受け入れて祭りに関わり交流が深まっていくような機運も生まれつつあるという。

(住みたくなるための条件)

①自然環境を楽しめる暮らし：自然農法体験、ジオパーク、川下り、季節の移ろい、など

②暮らしやすさ：都会ほどのものは求めないまでも基本的なインフラがある。

- 医療施設、
- 買い物（車がなくても暮らせるか、コミュニティバスはどうか)、
- 住まい（２地域居住用・空き家バンクの活用)、
- 多世代のニーズに応える居住スタイルの用意、第２の田舎（孫たちが訪ねてくる家）
- 住民と新住民がスムーズに溶け込める(受け入れる)コミュニティ、

③生きがい：何等か地域社会とのかかわりができる、

・仕事がある（賃金水準は低くても生涯活躍の意義を充たす働く場所）、
・学び・教える場（知的好奇心を満たす）、
・社会貢献・多世代の交流につながる活動の場、

④まつり：やはり秩父のコアコンピタンスは「まつり」（含むイベント）であろう。
・「夜祭」に限らず年間を通して行われる様々な「まつり」（文化・スポーツ等のイベントを含む）の機会に季節ごとに都会から人々が繰り返し訪れることで地域住民ときずなが生まれる。

⑤交流と発信
・仕掛け作りの場（農業体験、林間学校、銘仙織物体験、伝統和菓子他）を整備する。
・秩父の魅力を上手く発信しPRをすることで、体験を通じた継続的な交流が生まれ、住みたくなるまち、２地域居住、移住へと繋がる活動になる。

提案４『まつりでそだてる、わたしの秩父くらし』

豊島区・秩父市の長年の縁にもとづき、人と人をつなげる「まつり」を中心に幅広い反復・継続的な市民交流の輪を広げ、そこから住みよさと生きがいを発見し、「自分」なりの暮らし方を作り上げてゆく、**『まつりでそだてる、わたしの秩父くらし』**を提案する。

さらに言えば、秩父には、豊かな自然と伝統に育まれたいくつもの祭りがある。その準

幼少時代の遠足・林間学校に始まり、文化・スポーツ、農林業体験、観光・信仰など備や運営に必要な人手として関わり行事に参加することで生まれる仲間もある。の往来を通じて、多世代が多彩な生き方を知り、秩父が心豊かな暮らしを叶え２地域居住はもとよりやがて移住したくなるまちに発展してゆく。

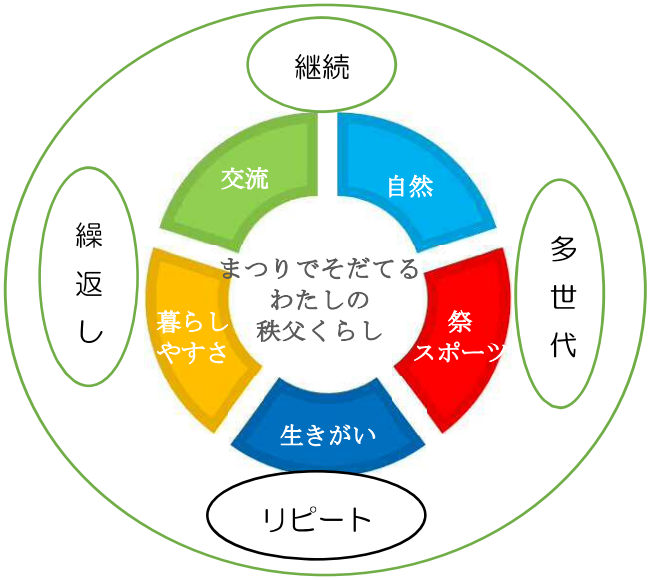
大都会でコンパクトにすべての機能が詰まった豊島区の魅力に対して、秩父にある豊富な自然と都会的な意味では、それなりの不便さが、かえって「秩父くらし」が人々を心身ともに充実したものに出来るのではないだろうか。

以上

文責：Ｅグループ　ファシリテーター　清水　誠

付表

『生涯活躍のまちとして、住みたくなるまちづくり



＊自然：山、川、花、ジオパーク、川下り、トレッキング、山登り武甲山
＊祭・スポーツ：夜祭、合宿、札所巡り、
＊生きがい：職場、学び、教室、社会貢献活動、空き家バンク
＊暮らしやすさ：病院・買い物・交通
＊交流：イベント、農業体験、林間学校、織物体験、和菓子作り、

まつりでそだてる、わたしの秩父くらし		
暮らしやすさ	祭・スポーツ交流・	生きがいの場
病院・買い物・交通	夜祭、イベント、合宿、 札所巡り、農業体験、 林間学校、織物体験、 和菓子作り、	職場、学び、教室、 社会貢献活動、 空き家バンク
自　然		
山、川、花、ジオパーク、川下り、トレッキング、山登り武甲山		

『地方居住を考えるワークショップ』参加者　（敬称略）

【秩父市関係者】

大島博明	廣瀬正美
高野幸基	松本賢治

【豊島区在住・在勤・在学者】

青木美恵	高橋敬子
石森宏	高橋菜美子
今田悟史	竹内康夫
岩熊徹	塚﨑裕子
岩渕祐子	坪野谷雅之
内田隆彦	手金奈都子
大歳美恵子	永江かよ子
大箸渡	中島ゆき
岡修爾	名古屋美鳥
落合仁史	野上正峰
笠原康次	野田研一
菊地萌花	長谷川晃世
北川昇	林俊雄
小池久雄	福原正憲
河野秀樹	堀本恵子
古室乃武男	宮崎弘行
酒井早苗	矢野泰秀
佐野英二	吉岡直子
清水誠	渡邊漸

（地域別５０音順）

秩父市・豊島区
「生涯活躍のまちづくりワークショップ報告書」

平成 29 年（2017 年）2 月
編集　豊島区 政策経営部 企画課
〒171-8422　豊島区南池袋 2-45-1